

移を認めた。この癌では短期間での急速な成長の機序が問題となるが、同時に PBC に合併した稀な胃癌症例であり、各種特殊染色の結果を含め報告した。

7) 胃病変を呈した True Histiocytic Lymphoma の 1 例

山田 聡志・富樫 満
黒瀬 龍彦・今津 和彦
熊野 英典 (新潟労災病院内科)

8) 内視鏡的治療をおこなった出血性胃・十二指腸潰瘍の検討

太田 宏信・黒田 兼
柳 雅彦・石川 直樹 (済生会新潟第二
病院消化器科)
吉田 俊明・上村 朝輝
石原 法子 (同 病理)
尾崎 俊彦 (尾崎クリニック)
本間 明 (本間 医院)

当院で内視鏡的止血を施行した静脈瘤以外の上部消化管出血例を検討した。

【対象】胃潰瘍72例、十二指腸潰瘍22例、胃癌6例、Mallory-Weiss 症候群2例、MALT リンパ腫1例、Angiodysplasia 1例の計104例で86例に露出血管を伴っていた。

【方法】局注法としてエタノール、および高張 Na-エピネフリン、またクリップ止血を併用した。

【結果】①止血率は93.3%であった。②止血不能例は7例あり4例は手術で救命したが、3例は死亡した。(肝不全、DIC をともなった胃癌、高齢で shock より回復せず) ③胃癌を9例(うち3例は合併した消化性潰瘍からの出血)、胃 MALT リンパ腫を1例認めた。④露出血管、潰瘍内凝血塊附着症例は一時的に止血していても高率に再出血するので処置すべきである。⑤局注による潰瘍の拡大、動脈瘤形成例は今後検討を要する。

9) 内視鏡的切除を行った十二指腸カルチノイド腫瘍の2症例

米山 靖・五十嵐健太郎
畑 耕治郎・塚田 芳久 (新潟市民病院
消化器科)
月岡 恵・何 汝朝

カルチノイド腫瘍は、アミンやペプチドを有する分化型内分泌細胞から構成される腫瘍で、各種ホルモン産生に伴い顔面紅潮、下痢、喘息、浮腫、心疾患などのいわ

ゆるカルチノイド症候群を呈することがある。本邦での頻度は少なく、発育緩慢で予後は良いとされるが、径が20mm以上のものは転移を起こす可能性が高いといわれ、慎重な取り扱いを要するものといえる。

当院ではここ5年間で2例、十二指腸に発生し内視鏡的切除を行ったカルチノイド腫瘍の症例を経験した。

症例1は53才男性、症例2は60才男性で、2例とも十二指腸に発生したカルチノイド腫瘍で、いわゆるカルチノイド症候群は呈さず、無症状で発見され、転移は認められなかった。どちらも内視鏡的切除(EMR)で腫瘍を摘除したが、追跡した限りでは再発は認めていない。しかし、完全治癒切除後数年を経たからの肝転移例も報告されており、組織学的な悪性度に関わらず、多年に渡る全身の経過観察が必要と考えられる。

10) 胆嚢十二指腸瘻から結石が排石されずに十二指腸壁内に止まった、十二指腸狭窄の1例

本間 丈成・畠山 眞
山川 良一 (下越病院内科)
会田 博・斉藤 俊一 (同 外科)
樋口 正身 (同 病理)

胆嚢十二指腸瘻に嵌頓した結石が排石されずに止まり、炎症性の十二指腸狭窄を合併した、希な1例を経験したので報告する。

症例は、47歳、男性。1996年4月頃より食後上腹部膨満、嘔吐出現、症状増悪したため6月26日初診。諸検査で十二指腸下行脚の浮腫性狭窄と壁内の石灰化像が認められ、保存的治療で狭窄は改善せず、胆嚢十二指腸瘻の胆石嵌頓の術前診断にて8月28日に手術を施行した。術中、球部から下行脚が一塊として触知され悪性腫瘍を否定できず臍頭十二指腸切除術を施行した。切除標本の検討にて胆嚢十二指腸瘻と嵌頓した結石、十二指腸壁の肥厚が認められた。病理組織学的検索では炎症性変化のみで悪性所見は認めなかった。

11) ホタルイカ生食を契機に腸閉塞様症状を呈した1例

黒岩 敬・古川 浩一 (厚生連村上総合
病院内科)

症例は、47歳男性。ホタルイカ10匹を生食した3日後、上腹部痛・腹部膨満感を訴え入院。麻痺性腸閉塞を呈し絶食・点滴管理及び減圧・イレウスカールで治療し改善